

9月30日(土)大会2日目：ポスター発表

- 1) 発表者：又吉正治
- 2) 所属：まぶい分析学研究会
- 3) タイトル：祖先崇拜における御願御廻り（神地巡拝）とその効用
- 4) 研究内容：

はじめにわが国には、大雑把に言えば、神道、仏道、元祖道という三つがある。神道は神を祀り、仏道は仏を祀り、元祖道は祖先を祀る。それぞれ、神道、仏教を基本にしているが、元祖道は、古代大和語が現存する沖縄における祖先崇拜の方法論を含む古神道である。元祖道は心理・精神分析学と誠に相性が良く、まぶい分析学として構築中である。その中に、まぶい分析学の臨床技法のひとつとも言える神地巡拝（御願御廻り¹）について述べる。

御願御廻りとは？これは箱庭療法を思い浮かべると理解しやすいだろう。住んでいる地域を箱庭とみなし、その中に、自分から究極の祖先に至るまでの家系が、要所要所に墓、宗家（元家）、寺、神社（御嶽）に象徴されて存在するわけだ。これらの地へ、目的に応じた祖先のゆかりの地を巡拝していくのが御願御廻りである。神地（聖地）巡拝とも言う。例えば、神々への登録、産水の御恩、育ち御恩、幼死の苦揺解き（水子供養）、…、諸々である。

祖先崇拜とは？特定の祖先を崇め拝むというのではなく、自身から究極の祖先（神、大自然）までを辿る過程で、血筋正し、御悟りを行いつつ、親・祖先に対する感情の浄化を行い、不必要に他者へ投影することを戒め、自分や家族の生き方を求める方法と言って良い。

神とは？一神教における神と区別し、多神教の神とするときは「カミ」とする。それは、その存在無しには人類が生存できない、平穏な心を維持できない程に絶大な影響力を有する生物もしくは非生物、天地万物と定義できる。

仏とは？御悟りと血筋正し²を行った結果、人や家族の在り方などの感じ入った（悟った）点を報告する祖先。生まれ年の干支と菩薩像との対応が為されている。中世²の祖先の象徴。

元祖とは？今世²を生きた個人名を特定できる祖先のこと。

身体内に存在する家系子は親の行動を真似る。また甘える（一体化する）。これは先祖代々から続いてきたものであり、子々孫々にまで続く性質を持つ。親もまた親をコピーしているのであり、この意味で我々からカミに至るまでの萬世一系が我々の無意識内に存在する。この繋がり（甘え）に問題が出ると、拗ね、僻み、恨み、不貞腐れ、自棄糞の心意が発生し、問題（病気を含む）が露呈する。問題解決のためには、つながりを元に戻すことが必要であり、これが御願御廻りである。

御願御廻りの東京近辺での実施 2017年10月1日（日）に、東京都町田市とその近郊での御願御廻りを実施する。また、その前日にフロイトやユングの夢判断法を日本文化に翻訳し、実生活に応用する勉強会を開く。関心ある方は著者まで（090-1940-0525）、and/or matayan1947@gmail.com

¹単に「御願」と言うことが多いが、これは概念が広く誤解が生じ易いのでこのように呼ぶ。

²臨床心理学研究、Vol. 53No. 1, Vol. 55, No. 1 拙著論文を参照。

- 1) 発表者：山本勝美
- 2) 所属：心理相談員協議会
- 3) タイトル：子どもの姿と子育ての姿
- 4) 研究内容：

親子関係は、子どもの成長発達のあるよう親の関わり方が、その時点でどのような相互作用を展開しているかにより、さまざまな姿に形成されていく。

本研究は、保健所の三歳児健診に来所した親子が示す具体的に関わり合う行動を対象にしつつ、親子関係の了解の仕方を検討してみた。

つまり、健診の中にある集団指導の場面で、4組の各親子双方の座っている姿が、どのような心のかかわり合いを表出しているかを考察してみた。

5) 方法：

以下に記した子どもの心の成長発達を示す5段階の図式（甘え・自立心・友だち＝ひと関係・生活＝集団・学習）（図1）を作成し、それによって子ども自身の心理的なダイナミクスを了解し、またそのありようを客観的に表現しようと努めた。

また、親の関わり方については、<しきる ―― されるまま>という縦軸と、<許 ―― 拒む>という横軸によって示される4領域、と、

そして、両軸の中央の円内の部分を、親の関わりの望まれる領域とし、総計5領域の（図2）によって表示した。

6) 研究結果：

<A>健診の来所者親子4組は、それぞれ図2の中の4つの異なる領域を示した。それは、会場での親子の座っている姿に通じる。

と同時に、集団での話し合いで示された各家庭の状況と通じると了解できた。

このほか、この4組の健診来所者親子とは異なる、個別相談に長期的に通う親子の成長変化が、子どもの心の成長発達を示す図1における成長発達と符合し、また、親の養育態度を示す図2における成長変化とも符合すると見られた。

7) 結論：

親子の関わり合いは、それぞれ子どもの成長発達のあるよう、各親の関わりようの相互作用によって、独自の、個性的なスタイルを示す。

それは例えば、健診時の集団指導の場面における親子の座り方においても、またグループ・トークの内容においても表出される。

健診従事者はそれらの場面を通して、親子の全体像を了解していくことが望まれる。また、その際に本研究で作成した（図1）・（図2）を親子の理解を深めるために利用することもできる。

- 1) 発表者：坂本 悠樹
- 2) 所属：株式会社 北関東マツダ
- 3) タイトル：きっかけ—不登校から自立にいたるまで—
- 4) 研究内容：

私は今年で33歳になる男である

まず私の親について書いておくことにする。父は子供の教育は母に任せきり、仕事から帰ってくればテレビを見ながら晩酌で、機嫌が悪ければ怒鳴り、ビール瓶が飛んできたりと今考えれば昭和の頑固親父だ。母は子供の教育を任されているという思いがあったのか、とても教育熱心だった。

このような家庭に育った私が不登校になったのは中学1年の2学期からだ。今でもよく覚えている、中学生になり体格のよかった私は柔道部に入ったのだが練習がきつくついていけなかった。

夏休みは毎日練習で高校生とも練習をした、小学生の頃から運動という運動をしていなかったのだから当然といえば当然なのだが、当時の自分は初めての挫折を感じていたんだと思う。

私はそれまで挫折など味わったことなどなかった、母が教育熱心だったおかげで成績はよかったし母が全てルールを敷いてくれた。後に分かることなのだが、当時の母は祖父、祖母からの教育を任されているというプレッシャーがあり教育ママになっていたのだ。私が不登校になったことで母は家族から責められたと思う、全て母の育て方が悪いことになっていた。自分が学校に行けなくなったことで母を苦しめている、でも学校に行けない自分がいる。これはこれで苦しかった。

それでも母は強かった。学校に無理やりでも連れて行こうとする家族から私を守り、なぜ子供が学校に行けなくなったのか調べ始めたのだ。それから母との関係はよくなったと思う、それまでも悪かった訳ではないが、小さい頃にした母の似顔絵は鬼のように角が生えていた。

そんな中で母から話があったのは、心療内科に行ってみないかということだった。その時私は中学2年だったと思う、自分でもなぜ学校に行けないのか、もしかしたら病気なのかと思っていたのもあり母と一緒に診察に行った。そこで待っていたのは心理テストのようなものをやらされ、その結果によってグループ分けをし、同じような結果の人達とグループで生活するような感じだったと思う。

でも私は馴染めなかった、自分は病気ではないと思う気持ちもあったし、何よりも数値的に判断されてグループ分けされるのがとても嫌だったからだ。自分は自分ひとりだし、自分を見て欲しかった。

母は諦めなかった、次は市が運営している適応指導教室というところだった。この時私は中学3年になっていた、誘い文句は学校に行かなくてもそこに行けば出席扱いになると…よく考えたものである。これだけ学校に行けてないと進路だって不安になる、それこそ将来どうなってしまうんだろうと。

これが「きっかけ」で私は適応指導教室に通い出すことになる。そこで出会ったのが先に出てきた恩師だ、この人は学校の先生ではなく教育心理学を学んでいる専門家だからと母もいっていた。始めは専門家というのを疑っていた、病院に行ったときもそうだったが、心理学を勉強しているということはその型に当てはめられるのではないかという思いがあったからだ。当時は今ほど普及してなかったインターネットで心理学について調べ、自分はこんな感じで見られているんだと学習し、こういう行動をとれば相手はこう出てくるなどよく試し行動をしていた。

しかし恩師は正面からぶつかってくる人でお互いの意見を時間の限り言い合ったこともあった。

何が「きっかけ」で人生どうなるか分からない。自分の中では恩師に出会ったのはとても大きかったと思う、だから今こうして仕事でも書かないような文章を書いている。

不登校、ひきこもりは病気なんだろうか？治療薬を飲んで行けるのだったらと親だって、本人達だってきっと思っているだろう、でも現実はそうではない。

親や周囲の人間は「きっかけ」を投げかけ続け、本人は「きっかけ」を掴む。このタイミングが難しいと思うが、私の発表が誰かの「きっかけ」になってくれればと願っている。